

九世紀以降の複雑多岐なる歴史経過のため簡單すぎる所もあるが大體一通り述べてをりムツソリーニ治下の現今イタリヤにまで及んでゐる。

以上は内容についてであるが、次に體裁について見るに卷末に附録として参考書目を擧げてゐる。これには特殊な専門的なものは省かれてゐるが、一般的な基礎的な良書、良論文をあげ、簡單ながら解説を付してゐる事は親切なやり方であらう。書籍の選擇も少いながら當を得てゐる様である。尙この他數葉の寫眞とイタリヤ地圖一葉が挿入されてゐる。

要するに、本書には望外の感を持つ箇所もあるが、全體を通じてイタリヤ史に關するまとまつた概説がなされてなり、更にイタリヤ史に於ける羅馬の意義に對する認識及びルネサンス、バロックを始めイタリヤ史全般に對する深い理解は、列國史叢書でふ一般的入門書である制限の中にあつても尙隨所に認め得るのであつて、かゝる意味に於て本書はイタリヤ史へのよき手引きであり、又その理解を深める上にも益する所大なる事を信するのである。(四六版本文三五七頁、附録一五頁、三省堂發行、定價貳圓參拾錢)(聽見)

### ● 現代の世界史

時野谷常三郎著

吾國に於ける西洋近世史の泰斗として既に定評ある著者は本書に於て、「現代世界の政治思想を中樞として一般政治史の概観」を試みられた。複雑多様な現代の諸現象に於て政治的文

化現象程に顯著なるはないであらう。著者は此複雑なる政治的諸現象を現代の世界に於ける政治を一貫するとみられる民族主義と世界主義並に民主主義とに關聯せしめるによつてその歴史的意味を求められたのである。著者が本書の序文に於て「吾が『現代の世界史』も亦此現實の生活を觀るに、成るべく過去の世界によらしめ、過去の世界を推すに、此現在世界の動向に依らしめやうとする」といはれて居るは、決して現代世界の諸現象を因果の又は有機的連關に結合せんとするのではなくて、前記の政治的傾向を通して諸現象を觀、その顯現とするによつて其れ等の事象の特殊的意義を究明せんとの意を表明されたものと推察されるのである。

本書は全五章、二十七節よりなり、民族主義と世界主義との意義とその歴史的發展をたづね(第一章)、世界大戰のよつて起りしゲルマン、スラブ、ラテン諸民族の民族主義的發展を叙述し(第二章)、大戰後世界各國に澎湃として勃興した民族主義の運動を概觀し(第三章)、更に大戰後各國内政上に支配的な傾向といふべき民主主義の發現を叙述し(第四章)、最後に前後六年に渉る大戰の反動として起りし平和思想、國際協調主義の發展について、グロチウス、シエリー、カント等の國際協調主義、平和論の思想的發展をかへりみ、國際聯盟の成立とその變遷について論述されたのである。本書は菊版二八七頁の書であつて、以上の諸事象について一々詳細を期することは出来ない。併し複雑なる諸事象に內的統一を與へて一貫せる歴史叙述に經

められしは著者の功績と言はねばならないであらう。(共立社書店發行、現代史學大系第十四卷)〔井上〕

### ●Homenaje a Vicuña Mackenna

(Anales de la Universidad de Chile 1931, 1932)

本書は最近のチリの歴史を「新しい方向へ向けなかつたとしても、少くもその進展に拍車をかけた偉大なる人格」とせられるベンソニオン・ユクニヤ・マケンナ Benjamin Vicuña Mackenna (1831—1886) の誕生百年祭(一九三一年八月二十五日)に際して、特に社会的の關係が深かつたサンチアゴ所在のチリ大學が彼に捧げた奉讃 Homenaje の書であつて、上下二卷からなり、主として彼の傳記を収めた外その著作等の資料目録なども收められてゐる。何れも四六倍版合せて千頁を越える大冊であつて、最近時野谷博士の許へ大學から寄贈して來たものである。

ビクニヤ・マケンナはその名によつても想像出来る通り元來ケルトの出であり、純粹のチリ人でもなければスペイン人でもない。祖父ファン・ビクニヤ・マケンナ Juan Vicuña Mackenna はアイルランドの人であつて、英吉利の支配を嫌つてスペインにわたり、そこで人となつて、或事情(これは傳記にも曖昧にしてあるが大體想像出来る)のために「新天地を求めて」南米にわたりチリに出て、チリの開拓戦争にオー・イツギンズ O'Higgins などとも轉戦し、更に彼と共に自ら云ふところの「獨立の最も光榮ある戦」(Las más gloriosas campañas de la Independencia)

を戦ひ、當時軍將の第一人者であつたといふことである。ベンハミンはその孫として一八三一年に生れたのであるから、人なる時期は例の獨立戦役も大方は片付き「祖父の血をうけた熱情の彼」も軍陣を馳驅する必要はなかつたが、革命の後をうけた社會の不公平階級の對立は劍の代に筆を持つて立たすにはゐられなかつたさうである。祖父の獨立 Independencia と自由 Libertad に對して彼は平等 Igualdad を唱へ、事實その盟友アルコンス Santiago Arcos など熱心なマルクシストでその派のものも研究した影響もうけたらしい。それが彼自身とチリの國家に對し、究極においてどういふ結果を結ばしめたかは、チリの現代を知らない私には分らないが、彼の傳記には何も書いてないやうである。しかしながら兎も角農民のためには大いに働いたことはその著作目録を見れば一斑は窺はれる。そして議會にも出て更に文教を支配するなど政治上の最も重要な位置にあつて、自らのモットー「生活は勞働である」(La vida es una faena)の通りに口に筆に「闘争的豫言者的」な生活を送つてゐたが、その大學と殊に關係があつたといふのは、この偉大なる市民がその一學部の翰林員 miembro académico であり、有力な顧問であるのみならず、その著作の幾つか、殊にその初期の歴史的方面的著作が大學の紀要によつて發表されてゐた事があり、その研究そのものにも大學との關係において行はれたといふのである。

そのため、盛大な百年祭の行はれた翌日、即ち一九三一年八